

桑名市大字五反田

七和2号窯址発掘調査報告

1973

三重県教育委員会

序

北伊勢は、鈴鹿市・徳居古窯址群、四日市市・岡山古窯址群などがあり、古代において県下の窯業主産地であった。

ここに報告する桑名市・七和2号窯址は、同一古窯によって、無釉の須恵器と、灰釉陶器とが生産されていて、県下では類例があまり知られていないものである。

今回の調査は、日本住宅公団・桑名大山田土地区画整理事業を動機としており、事業地内の調整池を中心とした公園緑地の一角にあたり、保存の余地ものこされている。

調査にあたり、日本住宅公団名古屋支所・桑名宅地開発事務所をはじめ、桑名市教育委員会等、地元関係各位のご協力をうけた。ここに謝意を表するものである。

昭和48年3月

三重県教育委員会
教育長 関根則之

例　　言

1. 本書は、日本住宅公団名古屋支所の委託により、三重県教育委員会が実施した桑名市大字五反田・七和2号窯址の発掘調査報告である。

2. 調査には、つぎの者があたった。

調査担当者 小玉道明（三重県教育委員会文化課）

調査員 伊藤信夫（県立桑名高校）

伊東春夫（同上）

太田元二郎（桑名市立成徳中学校）

水口昌也（桑名市立陽和中学校）

城田精明（桑名市教育委員会社会教育課）

須川昌宏（同上）

調査協力者 水谷忠生（前桑名市役所七和出張所長）

桑名高校郷土史研究部、成徳中学校郷土クラブ

3. 図版10の空中写真、図版1の地形図は、日本住宅公団名古屋支所・桑名宅地開発事務所による。

4. スキャニングによるデーター取り込みのため。若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I 調査の経過.....	1
II 位 置.....	2
III 古窯の構造.....	4
IV 遺 物.....	6
V 結 語.....	16

図 版

1 古窯と周囲の地形	11 古窯址全景
2 (1)古窯地形図・(2)灰原出土土器分布状況	12 古窯址全景
3 古窯実測図	13 古窯址近景
4 須恵器・杯、蓋	14 須 惠 器
5 須恵器・椀、盤、鉢 灰釉陶器、窯道具	15 灰 釉 陶 器
6 須恵器・瓶、壺、蓋、甕 土師器	16 灰 釉 陶 器
7 灰釉陶器・椀、皿	17 重焼き、焼台
8 灰釉陶器・瓶、壺、蓋、鉢	挿 図
9 土錘、棒状陶製品、獸脚、把手、拓影	七和古窯址の位置
10 七和古窯址群	

I 調査の経過

伊勢湾西岸地域でも、北伊勢の古代窯業生産址—古窯址には、四日市西部丘陵地の岡山古窯址群と、桑名員弁地方を流れる員弁川北岸の台地、丘陵地の七和古窯址群と暮明古窯址がある。これらのうち、岡山古窯址群については、昭和36年以降、三重大学歴史研究会、四日市市教育委員会等により、度々、調査され、かなり明らかにされてきている。⁽¹⁾

七和2号窯址がはじめて知られたのは、昭和25年、七和一播磨間の林道改修工事の時である。⁽²⁾その後、昭和38年には、桑名市文化財調査会により、一時、発掘調査の計画もすすめられたが、着手されることのないまま、今日にいたった。

今回の調査は、日本住宅公団名古屋支所の大山田地区土地区画整理事業を契機としている。昭和45年以後、三重県教育委員会、桑名市教育委員会では日本住宅公団名古屋支所桑名宅地開発事務所と種々協議をかさね、同年12月には、宅地開発事業地全域の遺跡分布調査を行なった。その結果、埋蔵文化財包蔵地としては、この七和2号窯址1基の該当することが確認されたため、現状のまゝ保存する方向で検討がすすめられた。しかし、調整池新設によるかなりの影響を考えられたため、昭和46年11月、発掘調査を実施する方針がきめられた。

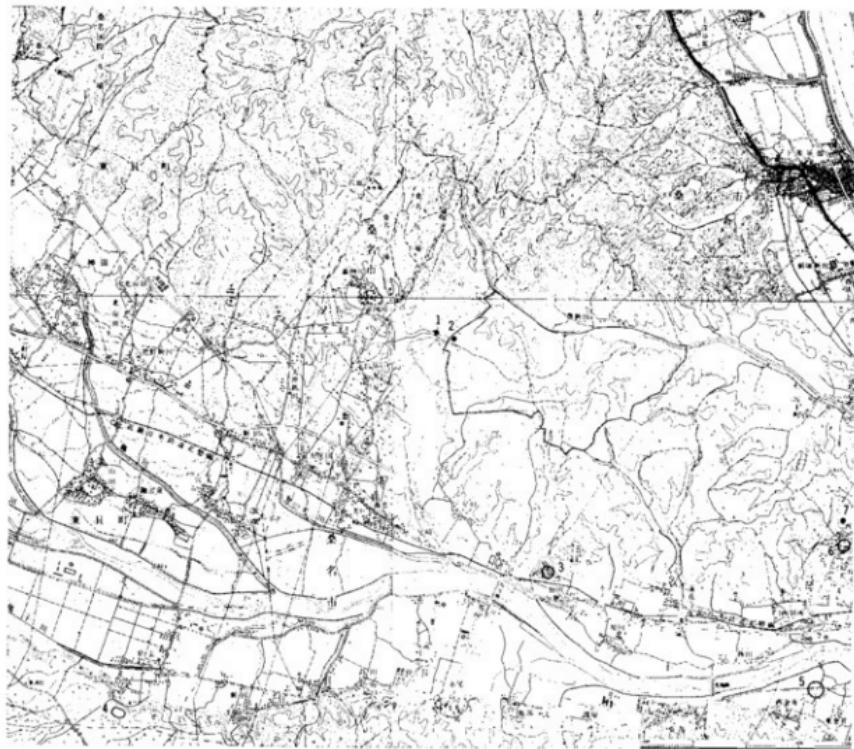
発掘作業は、昭和47年8月初め、猛暑のなかはじめた。発掘着手時の古窯址は、全体に松、灌木等におおわれ、斜面麓の林道の切り通し面に、現地表下50cm前後において、厚さ40cmほどの灰層が、長さ約6.5cmにわたって露出していたにとどまる。この露出した灰層を灰原の末端と推定し、古窯のつくられたと思われる傾斜地の雜木等の伐採から作業を開始した。伐採後、傾斜面の中ほどには、東西約8m、南北約3m、高さ約50cmほどの高まりがみとめられた。この高まりは古窯焚口前の作業面にあたるものとも思われた。これを中心に、東西、南北に方2mの小発掘区を設定し、東西にアルファベット、南北にアラビア数字をあたえ、小発掘区の標示とした。

灰原は、林道に露出した所から、地山まで掘り下げ、順次、斜面上方へ掘りすすめ、発掘着手当初みられた斜面中央のたかまりの上端に焚口がはじまる窯本体を明らかにした。また一方、林道下方へも灰原がひろがっていくことが、途中でわかった。しかしこの部分は、斜面上方からの流出土により、現地表下2m近くまでも埋没していたため、表土をブルドーザーによって除去し、ほぼ灰原の末端まで完掘することができた。

この間、地元桑名市教育委員会の各位はもとより、日本住宅公団名古屋支所桑名宅地開発事務所的場正良氏には、何かと協力をいただいた。また、発掘後の出土品整理にあたっては、名古屋大学考古学研究室助教授柄崎彰一氏のご指導を得た。

II 位 置

七和古窯址群は、桑名の市街地の西方約4.3kmにあり、地籍は、桑名市大字五反田字茨谷2007番地に属している。桑名市の西部でも、藤原岳に水源をもつ員弁川の北岸一帯は、標高90m内外の高位の台地が、よく浸食されて起伏がおおく谷密度の高い地形となっている。七和古窯址群もそうした谷の一つにつくられたものである。これらの谷は、員弁川の支流・嘉例川へ向って東から西へ流れる谷川につづいている。全体に、松を主としながら雜木におおわれているが、古い浸食によってできた各所の崖面には、白色粘土層が厚く露出している。



大山田土地区画整理事業区域と七和古窯 (1, 2) 3. 須田庵寺 4. 新野遺跡 5. 西金井遺跡
6. 西方庵寺 7. 西方瓦窯

古窯址群としては、現在までに 2 基が確認されている。今回、調査した 2 号窯址は、西方の嘉例川に注ぐ小川の流れる谷の一つの支谷の入口につくられている。標高は 53m～56m で、南北に細長くのびる丘陵の支脈の南麓にあたり、文字通り谷合いの地となっている。

一方、1 号窯址は、西方へ約 350m はなれ、同じ谷でも入口に近い丘陵支脈の南麓につくられている。現在、この古窯本体は先の林道によって縦断され、その断面が切り通し面にみられる。灰原は、南側の谷頭水田下にひろがっていて、陶器片が散在している。

員弁、町屋川流域でも、中流から下流域にかけて、いくつかの奈良時代から平安時代の遺跡が知られている。南西 5 km の員弁川の南岸の台地上には、七和古窯群とほぼ同時代の新野遺跡があり⁽⁴⁾、県内でも創建時期のはやい桑名市額田庵寺は、南方 2.4 km にある。弥生時代、古墳時代の各時代の土器とともに多数の灰釉陶器が出土している桑名市・西金井遺跡は、南東 5.8 km の町屋川の南岸の氾濫原にある。⁽⁵⁾また、県内でも有数な経塚群としての多度山経塚は、北方約 6 km にあり、同じ多度山のさらに 1 km はなれた東麓には、古く「桜樹郷」（美濃国石津郡）銘の木簡出土で知られる桑名郡多度町・柚井遺跡がある。⁽⁶⁾しかし、古窯址としては、北西 6 km の丘陵地の溜池の一つ奴女里溜の北側にあった員弁郡員弁町・幕明古窯址が知られているだけである。

註

- (1) 山沢義貴「岡山古窯址第 1 号窯」『四日市市埋蔵文化財調査報告』1 四日市市教育委員会 1966
小玉道明、山沢義貴「岡山古窯址群発掘調査報告」四日市市教育委員会 1971
- (2) 伊藤勝喜「郷土（七和）の展望について」『研究紀要』8 桑名市教育委員会・桑名市教育研究会 1957
- (3) 鈴木成淵（北勢教育事務所）須川昌宏（桑名市教育委員会）伊藤信夫（県立桑名高校）
太田元二郎（桑名市立成徳中学校）水口昌也（同陽和中学校）の諸氏による。
- (4) 三重県教育委員会「新野遺跡発掘調査報告—C 地図」 1972
- (5) 昭和39年 桑名市教育委員会 三重大学歴史研究会 発掘調査
- (6) 「桑名市史」本篇 補篇 1959 1960
- (7) 三重県『三重考古図録』1954

III 古窯の構造

1. 古 窯 (図版 3)

古窯は、煙道をほぼ真北にむけた半地下式のあな窯である。天井部はすべて落下し、煙道部の大半は、すでに流出していた。したがって、焚口から現在の煙道部までの全長は 6.2m である。巾は、燃焼部で 1.3m、焼成部で 1.0m と、あまり差はない。高さは、明らかでないが、のこっている壁面の傾斜からたどって燃焼部で約 1.2m ほどと思われる。

床面は、焚口では 1 面、燃焼部では 2 面、燃焼部から焼成部とのつながりでは、1 面となり、焼成部は全体に 2 面、焼成部末端から煙道部では 3 面ほど、塗りかさねられている。したがって傾斜もことなり、操業当初（第 1 次床面）では約 35 度、最終時（第 2 次、第 3 次床面）では約 39 度と、かなり急になっている。しかし壁面は、全体に 1 面しかみとめられない。

焚口は、巾 1.3m で、床面、壁面とも、赤く固く焼けている。床面はほぼ平坦で、燃焼部にむかって 10cm ほど下降している。

燃焼部は、床面が焚口寄りでは 2 面ほどみとめられるが、奥では 1 面となって焼成部へとつづいていく。第 1 次床面は鼠色に固く焼けているが、第 2 次床面は赤色をしめしている。なお、分焰柱あるいは「船底形ピット」はみとめられない。

焼成部は、第 1 次床面が燃焼部と同様、厚さ 3cm ほど、鼠色に固く焼けているが、最終時のものは、赤く焼けたままとなっている。床面上には、数個の馬蹄形の焼台がのこされていた。この焼台も赤く焼けている。陶器類はほとんどのこされていなかった。

煙道部寄りでは、床面が 3 面ほどみとめられたのであるが、そのうち第 1 次床面、第 2 次床面は、鼠色に固く焼けている。最終床面は、赤く焼けたままとなっている。また、第 2 次床面では現在末端部分が、盛り上がり、煙道部へのつながりを思わせるとともに、古窯の全長としても、かなり縮少されたことがかんがえられる。

焚口前の前庭部は、南北 2m（斜面に対して上下）、東西 3.5m（斜面に対して左右）ほどの半円状のせまい平坦面をなしている。この平坦面は、焚口に向って右側がわずかに広い。また、古窯から左右へ 3m ほどはなれた所でも、せまい平坦面が、傾斜地を凹ましてつくられていた。

2. 灰 原 (図版 2)

灰原は、東西約 15m、南北約 15m のほぼ方形の範間にひろがっている。全体に厚さ 40cm～1m 近く流出土におおわれていた。とくに、南東側では約 2m 近くも深く埋まっていた。灰層の厚さは、40cm～50cm であった。また、東端、西端、南部では、灰がほとんどなく、陶器片だけが、多

数出土している。

一方、古窯本体の両側においても、広く焼土、灰混りの土とともに、陶器片がかなり出土していて、古窯構築時の地表面を思わせた。この旧地表面から古窯床面までは、50cm前後ほどあり、古窯が半地下式のものであることがよくみとめられた。

灰原全域にわたって、須恵器、灰釉陶器の両種の土器が出土している。これらは、灰層内において混在した状態となっていた。とくに多いのは、古窯焚口前と、これに接した約40m²の範囲と最も斜面下方にあたる南東部であった。しかし、須恵器と灰釉陶器との出土の状態は、一定の傾向がみとめられた。須恵器は、焚口の前庭部に多く出土し、灰釉はその周辺に多く埋まっていた。

また、土師器もかなりの量が出土している。これは、灰原でも南東部に多くなっていた。

IV 遺 物

遺物は窯内にはすくなく、灰原から多量の須恵器、灰釉陶器、土師器、土錘、焼台等がある。遺物整理箱（40×60×10cm）にして、200箱におよぶ。須恵器は、杯、蓋、盤、椀、壺、瓶、鉢、甕等があり、灰釉陶器には、椀、皿、鉢、瓶、壺等がある。須恵器、灰釉陶器とともに、杯、椀、皿類が大半をしめ、壺、瓶、甕類は比較的すくない。窯道具としては、椀形、壺形のものと、馬蹄形焼台がある。

このうち、椀形および壺形の窯道具は、図版5の56—64、94—95である。須恵器風の製品であるが、愛知県猿投窯においては、灰釉陶器を焼成する際に用いられている。

1. 須 恵 器

(1) 杯 (図版4)

杯A (23—44) 高台をそなえた杯で蓋付のものである。口径の大きさ及び蓋の大小とも対象させ、I—VIIに区別される。いずれも、それぞれの口径の差が1cm以内にとどまり、強い規格性がみとめられる。直線的に外傾した口縁部のもので、高台は、口縁部の直下につけられているものが多い。口縁部と底部上面は、ていねいに水引きされ、底部下面は、ていねいにヘラ削りで仕上げられている。

杯A I (23—27) は、径21cm～22cm、高さ3.2cm～4cm。27以外は、比較的つよく外傾している。27は、底部がひどくゆがんでいる。

杯A II (28—31) は、径16.5cm～17.5cm、高さ5.2cm～5.7cm。杯A IIIとともに、深く大形。

杯A III (32—34) は、径14cm～15.3cm、高さ6.5cm～6.8cm。口径にくらべ深手のもので、高台端部は外側へ丸味をしめて肥厚させ、他の類の高台とは形を異にする。胎土には、砂粒が比較的ふくまれる。固く焼成されているが、色調が茶色～茶褐色である。

杯A IV (35—38) は、径12.5cm～13cm、高さ4cm。杯Aのなかでも、もっとも多いもので、杯Bのうち45—46のような口縁部が直線的なものに高台をそなえた格好をなす。38はこの杯A IVのうちでも高台が大きく、胎土、色調とも、杯A IIIに類似している。

杯A V (39) は、径11cm、高さ4cm。杯A IVと類似するが、やや小形で深目のもの。

杯A VI (40—43) は、径9.5cm～10cm、高さ4cm。小形のもので、全体に出土量はすくない。

杯A VII (44) は、径8.8cm、高さ4cm。杯A VIとほとんど同巧であるが、やや口径が小さく、口縁部がわずかに丸味をもつ。

杯B (45—50) 径12cm～13cm。高さ3.5cm～4cm。高台をもたずヘラ切り不調整の広い底部で、

ほとんど直線的に外傾した口縁部のもの。口縁部と底部上面は水引きによる凹凸をのこす。48～50は、腰部に丸味をもち、椀にちかいが、底部の切りはなしが、ヘラによるため、杯Bとした。

(2) 蓋 (図版4)

蓋A (1-22) 杯Aの蓋にあたるもので、大きさからI～VIIに区別される。扁平であるが、頂部にわずかな凸起のある鉢をそなえる。天井部は、ていねいにヘラ削りで仕上げられ、口縁部と天井部内面は、ていねいに水引きされている。端部は断面三角形にひきだされている。杯Aと同様、規格性のよいものである。

蓋A I (1-5) は、径21cm～22.5cm、高さ2.6cm～4cm。天井部は広い平坦面をなし、端部は断面三角形で、端面中央がわずかに凹む。天井部内側は、水引きのあと、一方向に横なでされている。この横なでは、蓋A IIにもみられる。

蓋A II (6-10) は、径16.5cm～17.5cm、高さ4cm～4.3cm。10以外は、丸味の天井部のもので、杯A II、同IIIの蓋にあたるものであろう。全体に口径にくらべ深目である。

蓋A III (11-15) は、径13.5cm～14.5cm。高さ3cm～4cm。杯A IVの蓋であろう。このうち比較的あさい11～13と、天井部が平で深い14～15がある。出土量はもっとも多い。

蓋A IV (16-18) は、径12.3cm、高さ3cm。蓋A IIIよりやや小形で、杯A Vの蓋であろう。

蓋A V (19-21) は、径11cm、高さ2.8cm～3cm。小形の杯A VIの蓋であろう。

蓋A VI (22) は、径10cm、高さ3.7cm。比較的深目のもので、杯A VIIの蓋であろう。

蓋B (104) 径5.5cmの高台風で環状の鉢をもつもの。鉢と天井部の破片で、全体の器形は不明。天井部はていねいにヘラ削りで仕上げられている。1点だけ出土している。

蓋C (101) 径12.5cmのもので、薬壺の蓋であろう。平坦な天井部から屈曲して垂直な口縁部のもので、端部はするどくひき出されている。扁平な鉢をもつと思われる。他に2個体ほどの破片が出土している。

(3) 盤 (図版5)

盤A (65-69) 径17.3cm～18.5cm、高さ2cm～2.5cm。広い底部に、よく外傾した口縁部のもの。69以外は端部が丸味をもった断面三角形状にひきだされ、内側に段をつくって沈線をめぐらした風となる。底部下面は、全体にヘラ削りでていねいに仕上げられている。69は、口縁端のつくりが、他のものと異り、端部は面取り風なせまい端面をなし、内側に沈線状の段をともなわない。底部から口縁部への屈曲も65-68のように鋭くなく、丸い。

盤B (70-74) 浅い皿部に高台をそなえたもの。口径の大きさからI～IIIに区別される。外傾した小さい口縁部に、広い底部のもので、底部下面は、ていねいにヘラ削りで仕上げられる。

盤B I (70—72) は、径20.8cm～22.5cm、高さ3.3cm～3.9cm。底部下面是、高台部をのぞいてヘラ削りされている。高台は径12.3cm前後で広く、端部が外側へ肥厚している。

盤B II (73) は、径19cm、高さ2.8cm。他のものと異り、高台径が9.9cmと小さく、盤の口縁端がわずかに肥厚している。

盤B III (74) は、径17cm、高2.6cm。もっとも小形のものであるが、高台径は、盤B Iと同様、広いものである。

高盤 (75—87) 浅い皿部に、高杯の脚風の脚をそなえたもの。皿部と脚部とが接合したままのものは出土していないが、胎土、色調から、76—77の皿は78—80の脚に、81—83の皿は、84—87の脚につくものと思われる。それぞれの形態から、A、B、Cの3種に区別されよう。

高盤A (75) 径23cmで、口縁部が盤Bとほとんど同巧のもの。脚部は不明だが、細い脚がつくであろう。

高盤B (76—80) 径22cm～24.5cmの盤に、透孔のつけられた太い脚をそなえたもの。盤部は口縁部がたちあがり、端部が外側へわずかにおりまげられて広い面をなす。底部下面是よくヘラ削り仕上げられている。脚部には三方に透孔をつけた78と、五方に透孔をつけた79—80がある。器表はていねいに水引きされ、盤部とともに、うすく褐色の釉が全面にみとめられる。

高盤C I (81、84—85) 径27.2cmの浅い大形の盤部に、細く高い脚部をそなえたもの。盤は、底部から口縁部へ直線的なもので、器表は水引きされたまま。脚部は、中位に浅い沈線を2条めぐらした84と、沈線をめぐらさない85がある。85には、内外ともにしばり目がのこる。

高盤C II (82—83、86—87) 径15cmの円盤状の盤部に、細い脚部をそなえたもの。脚部86には内外ともしばり目がのこる。

(4) 梗 (図版5)

梗A (51—55) 径12cm～13cm、高さ3.2cm～4cm。盤Bのうちの48—50と形が似ているが、糸切り底のものである。口縁部が内弯気味の51と、直線的な52—55がある。

(5) 瓶 (図版6)

長頸瓶A (96—100) 頸部が比較的太い長頸瓶A Iと細い長頸瓶A IIがある。いずれも口縁端が肥厚して断面三角形をなし、頸部中位に2条のあさい沈線をめぐらす。二段構成のものである。

長頸瓶A I (96) は、径9.5cm、長さ9cmの口頸部で、胴部は不明。内側にしばり目がわずかにのこる。

長頸瓶A II (97—100) は、径6.4cm、長さ7.5cmの細目の口頸部に、肩部はよく張るが、全体に

丸味の胴部の高台付のものである。胴部は全体にうすくひきだされ、底部下面と、胴部中位以下は、ていねいにヘラ削りされている。口頸部の98には、内外ともしばり目がのこる。

(6) 壺 (図版 6)

短頸壺A (107) 口径10cm、高さ19.5cm。直口状のみじかい口縁部に、よく肩のはつた胴部で、高台をつけ、薬壺と称されるものである。肩部以下はていねいにヘラ削りされている。肩部にはうすく褐色の釉がみられる。

短頸壺B (108—109) 口径13.3cm～14.3cm。体部は不明。外反した短い口縁部で、壺110の口縁部とつくりがよくにている。胎土に砂粒がふくまれ、焼成もあまり。

(7) 鉢 (図版 5)

鉢A (91) 径24.7cmの口縁部の断片。わずかに外反する小さな口縁部をもつ。体部は不調整。他に1個体分の破片がある。

鉢B (88—90) 径18.5cm～18.8cm。高さ7.2cm～7.8cm。中位で内側へつよく屈曲して口縁部となる高台付のもの。口縁部がたちあがって端部が外反する88と、口縁部が内側へ屈曲しながら、端部がつよく外反する90がある。いずれもうすぐひきだされ、底部下面と体部中位以下は、ていねいにヘラ削りされている。図示の他、3個体ほどある。

鉢C (93) 径15cm、高さ11cm。底部をはじめ全体に器壁があつく、すり鉢とよばれているもの。厚い底部の縁と下面には、あらく刺突されている。図示した1点だけが出土している。

鉢D (92) 径22.5cmのもので、底部は剥落していて不明。全体にうすくひきだされ、端部がわざかにたちあがる。焼成はあまり。灰釉陶器の生焼け品ともおもわれる。

(8) 壺 (図版 6)

壺A I (113—114) 径21cm～23cmの口縁部。113は肩部に平行のタタキ目があり、内側は同心円のタタキ目が消されている。114も肩部内面は、同心円のタタキ目がすり消されている。

壺A II (115—116) 径33cmの広口のもので、口径にくらべ短い頸部をなし、平底の116とは同一個体とおもわれる。頸部外面には、十字の陰刻がある。壺A Iよりていねいに水引きされている。底部の116は、外面に格子目のタタキ、下方は、タタキ目の上を多方向にヘラ削りされている。内面は同心円のタタキがすり消されている。

壺B (110) 径21cm、高さ約25cm。広く短い口縁部に長い胴のもの。器表の調整は粗雑で、底部近くにはタタキ目があり、すり消されている。胎土には砂粒が多くふくまれ、焼成はあまり。

壺C (105—106) 口径11.5cm～14cmの小形の口頸部の破片。端部はひき出されてわざかに立

ちあがり、外側でせまい面をなす。肩部の張りのつよいものである。

甕D (111—112) 径10cm～12cmの小形の口縁部から胴部の破片。端部はひき出されて、わずかにたちあがる。底部は不明だが、胴長のものであろう。器表の調整は粗雑で、胎土に砂粒を比較的多くふくむ。

甕E (117) 径18cmほどの無頸の大形のもの。口縁部に径1cmの円孔をうがつ。肩部には平行のタタキ目、内面はヘラ削りされている。胎土に砂粒を多くふくむ。焼成はあまり。

(9) そ の 他 (図版9)

16 径2.8cmの現長7.5cm。径6mmの円孔が貫通している。両端が欠けていて器形は不明。器表はヘラで調整されている。

19—20 径2.3cm、長さ8.8cmの円筒状のもので片面だけ、ある器形のものに接合されたもの。両端はするどくヘラで切斷され、器表もヘラで仕上げられている。19と20は全く同巧のもので、19は立面を、20は側面を図示している。

(10) 文字、記標等拓影 (図版9)

27 高盤Bの78の脚端部の内面。「成」と太くヘラで陰刻されたもの。

28 杯A IVと同巧の小形の杯底部下面。ヘラ削り調整された後、筆順が現行とはことなるが「主」と陰刻されている。

29 蓋A IIの6—9と同巧のものの天井部の内面。「×」印。31も蓋の天井部の内面のラセン状の陰刻。破片のため、器形は不明。

30 杯Bの45—47と同巧の底部。焼ひずみがひどいが、ヘラ削り仕上げされた後に、△状に陰刻されている。

33 杯Bの45—47と同巧の底部。ヘラ切りのもの。

38 盤Aの67の底部下面。ヘラ削り仕上げのもの。

39 甕Eの117の無頸のものの口縁部。

40 甕Bの110の底部と思われるもののタタキ目。一部すり消されている。

41 全体の器形は不明だが、甕の破片。

42 甕A Iの113の肩部。

2. 灰釉陶器

(1) 梗 (図版 7)

梗A (201—222) つけ高台のもので、大きさから I ~ IV に区別される。底部は糸切りによるが、大形のものは、ヘラあるいは水引きでほとんどその痕が消されている。

梗A I (201—208) 径16.7cm~18cm、高さ5.3cm。内窓気味の体部で、端部が外反する。高台の大きく高い201—205では、口縁部の下半と底部下面がヘラ削りで仕上げられている。この梗A I のうちでもやや小さい206—208では、高台の付根寄りと底部下面がヘラ削り仕上げ。

梗A II (209—211) 径14.5cm~15cm、高さ4.5cm~5cm、高台径3.5cm前後。梗A III と法量として差は大きくないが、高台から口縁端までが、梗A III より 1cm 以上長目のもの。底部下面は糸切り痕がほとんど消されている。

梗A III (212—216) 径12.8cm~13.5cm、高さ4cm~5cm、高台径は3.7cmで、梗A II の高台とはほとんど同じである。梗A のうちでもっとも多く出土している。底部の糸切り痕は、高台の付根以外はよくのこっている。217は、径12.5cm、高さ4.5cm。梗A III の口縁部の片方が折られ、広い片口がつくられている。

梗A IV (218—222) 径10cm~11cm、高さ4cm~4.5cm。梗A のうちで、もっとも小形でしかも体部がよく内窓している。出土量はすくない。

梗B (224) 径14cm、高さ4cmの無高台の糸切底のもの。底部、体部ともにうすくひきだされている。内面だけにあつく施釉されている。

梗C (230) 径17.2cmの口縁部の破片。底部は欠けていて不明。うすくひき出され、体部下半は、ヘラ削りで仕上げられている。内側には低い段をめぐらす。

輪花梗 (241) 径16cm、高さ5.8cm。端部に痕跡程度の輪花がつけられている。破片のため、何方につけられているか不明。他に10数片の輪花付の口縁部の破片が出土している。

(2) 皿 (図版 7)

皿A (223、231—240) 高台付のもので直線的に外傾した口縁部のもの。大きさから I 、 II 、 III に区別される。

皿A I (231—235) 径15cm~15.8cm、高さ2.8cm~3.8cm。梗A II と同巧の高台をもち、端部がほとんど水平に仕上げられている。高台底の糸切り痕は、ほとんど水引きにより消されているものが多い。とくに232の底部下面ではヘラ削り風に仕上げられている。

皿A II (236—240) 径12.5cm~12.8cm、高さ2.3cm~2.8cm。口径に比べ広い高台をつけ、口縁部は直線的に外傾したものが多い。高台は、皿A I に比べ低く部厚い。

皿A III (223) 径11.8cm、高さ2.9cm。口縁部は直線的にうすくひき出されているが、調整はやや粗雑。高台は低く、断面三角形状をなす。出土量は全く少ない。

皿B (225) 径15cm、高さ2.3cm。皿A I の高台をつけない形であるが、口縁部がわずかに外反する。底部は糸切りのまま。内面は、あつく施釉されている。

皿C (226—227) 径13cm～14cm、高さ1.3cm。口縁部が外反した、浅いもの。底部は中央がきわめてうすく、糸切りのまま。施釉されているが、ほとんど剥落している。焼きひずみがひどい。

皿D (228) 径11.7cm、高さ1.2cm。広い糸切りのまゝの底部に、小さく内湾した口縁部のもの。焼成はあまり。

皿E (229) 径10cm、高さ2.5cm。糸切りのままの底部に、口縁部がよく立ち上った小形のもの。1点だけ出土している。

輪花皿 (242) 径15cm、高さ2.5cm。皿A I の口縁端に痕跡程度の輪花をつけた形のもの。断片のため、何方に輪花をつけているか不明。高台は9cmで広く、底部には糸切り痕がのこる。

段皿 (243—255) 高台付の大小の皿の口縁部の内側に段をめぐらすもので、その大きさからI、II、IIIに区別される。そのうち大形のIは、広縁のIaと狭縁のIbに細別できる。

段皿I a (243—246) 径17.5cm～18cm、高さ3.8cm～4cm。比較的高い高台をそなえ、口縁部内側の段から端部までが4cm前後の巾のあるもので、口縁部全体としては直線的である。底部下面と口縁部の高台寄りは、ヘラ削りで仕上げられている。

段皿I b (247—250) 径17.5cm～18cm、高さ3.5cm～4.2cm。縁の巾が2cm前後で、外側にも段をしめす。口縁部は腰部で丸味をしめながら、端部で外反している。底部下面から口縁部下半は、ヘラ削り調整されている。とくに248では、高台の剥落した所に、糸切り痕がみとめられ、底部下面が、糸切りの後、ヘラ削りで仕上げられていることがみとめられる。

段皿II (251—253) 径14.5cm～15.5cm、高さ2.3cm～2.8cm。段から縁部までの巾は2.8cmで、口縁部全体がよく外反している。高台は他のものにくらべ比較的ひくい。底部下面は、ヘラ削り仕上げされている。

段皿III (254—255) 径13.5cm、高さ2.8cm～3.1cm。高台は段皿IIより高く、底部下面には、糸切り痕がのこる。内側の段は他のもののように明瞭でない。

耳皿A (257) 口径13.3cm×5.5cm、高さ4.8cm。高い高台をもち、皿の両端が内側に折りまげられたもの。折りまげられた端部はヘラで波形に仕上げられている。内側は全面あつく施釉されている。

耳皿B (256) 口径11.5cm×5cm、高さ3cm。糸切り底で無高台。口縁部のつくりは、耳皿Aと同様である。

(3) 瓶 (図版8)

長頸瓶 (258—272) 口頸部、胴部、底部などの各部分の破片で、全体の器形は不明。口縁部および底部の大きさから、長頸瓶Iと同IIとに大別できる。いずれも体部と口縁部との接合は二段構成である。比較的よく施釉され、胎土は灰色をしめすものが多い。

長頸瓶I (258—260、265—268) 口縁部径14.5cm～17.5cmの太い大形のもの。265—268のような胴部、底部となり、胴長のものと思われる。体部は肩部あたりからヘラ削りで仕上げられ、広い底部は下面もヘラ削りされている。

長頸瓶II (261—264、269—272) 口径10.7cm～12cmの小形の口縁部に、269—272のような胴部、底部のものであろう。体部は269のように肩部あたりからヘラ削り仕上げされている。底部もヘラ削り仕上げされているが、270では糸切痕がのこる。また、体部内面は底部上面とも、水引きによる凹凸がよくのこる。

手付瓶、多耳瓶 (図版9; 21—25) 大小の把手だけがわかり、全体の器形は不明。

平瓶 (280—281) 径10cmの直口状の口縁部と、断面が扁平な把手片がある。

(4) 壺 (図版8)

短頸壺A (273) 径12.5cmの大形の口縁部の破片。比較的うすく器壁がひき出され、器表にはあつく施釉されている。

短頸壺B (274—278) 平底で短い口縁部をもち、肩張りのある胴長の小形のもの。口径6.5cm高さ13cmの274のように長目のもの、口径約6.5cm、高さ約10cmの275のように低いものがある。底部は糸切りのままで、器表はあつく施釉されている。

(5) 蓋 (図版8)

蓋 (279) 径10cm、高さ3.6cm。宝珠形の鉢をもち、口縁部が垂直にちかい。薬壺類の蓋であろう。天井部はヘラ削りで仕上げられている。表面は全体に施釉される。1点だけ出土。

(6) 鉢 (図版8)

鉢A (284—285) おそらく片口付のものと思われる。外へよく張った広く高い高台をもつ。口縁部近くからヘラ削りされている。285は、径24cm、高さ9.6cm。半焼成。

鉢B (282—283) 径17cm、高さ8cm。口縁部は直口状になり、282では内側に、281では内外

とも、細い沈線がある。底部下面と口縁部の中ほどまでヘラ削りされている。いずれも内面だけあつく施釉されている。高台は小さく、削り出し風もある。

鉢C (286) 径20cmの口縁部の破片。わずかに内弯した口縁部で、端部は面をなす。

(7) 火 舎 (図版6、-9)

蓋と獸脚が出土している。体部は不明。

蓋 (102) 径24cm、高さ7.5cm。宝珠状の高い鉢をもち、丸味の天井部で、中位にハート形の透孔が五方につけられている。天井部はていねいにヘラ削りされている。焼成はあまく、生焼け。

獸脚 (図版9; 17—18) 17は大形のもので、つくりも粗雑である。胎土に砂粒が多い。18は、やや細目のもので、胎土もよく、全面にあつく施釉されている。

(8) 相 輪 鉢 付 蓋 (図版6; 103)

径19cmの口縁部に、高さ8cmの相輪鉢をもち、全体の高さは13cmある。鉢は七重の輪をかさね、口縁部の天井には、3条の沈線をめぐらす。鉢から天井部へは、径7mmの円孔が貫通している。胎土には砂粒が多くふくまれる。焼成はあまく、生焼けで、器表は剥落している。

(9) 底 部 拓 影 (図版9)

26 梶形窯道具Bの59の口縁部。一方に「山中家」とヘラで細く2ヶ所、陰刻されている。

32 は、同じく61の底部で、ヘラ切りされたもの。

34 短頸壺Bの274—278と同巧のものの底部の糸切り。

35 耳皿Bの256の糸切り底。

36 皿A IIの237の底部下面。糸切り痕が高台の内側だけ、横なでで消されている。

37 皿A Iの234の底部下面。ヘラ削りのあと、なでで仕上げられている。

3. 窯道具 (図版5)

楕形、短頸壺のもの及び馬蹄形焼台がある。トチ、ツクなどは出土していない。したがって、楕、皿も直接、重ね焼きされ、融着したものもある。

楕形窯道具A (56—58) 口径10.5cm、底部径12cm~13cm、高さ4cm。底部に最大径をなし、口縁部は内傾している。底部下面是ヘラ切り不調整で、底部上面は水引きによりラセン状に波形をなす。Bとともに、口縁部の一端が、焼成後、欠かされた状態のものがおおい。

楕形窯道具B (59—64) 口径5cm~6cm、底部径8.2cm~10cm、高さ4cm。Aと同巧のものであるが、口縁部がつよく内傾している。

壺形窯道具 (94—95) 径5cm～5.5cm、高さ3.5cm。広い底部に、外反した小さな口縁部の小形のもの。底部下面は、ヘラ切り不調整。94は、器表の内外とも釉が剥落している。

馬蹄形焼台 数10個ほどが、窯内および灰原の各所から出土している。灰原出土のものは、よく火熱をうけ、鼠色で固く、底面以外に釉がよくみられるほどのものがおおい。窯内出土のものは、赤色で軟質である。

4. 土 師 器 (図版6)

甕 (118—119) 118は、径21cmほどの口縁部でつよく外反し、端部がわずかにひき出されている。119は、径19cmの口縁部から肩部で、内外ともハケ目調整されている。いずれも器表はひどく剥落し、胎土には砂粒がおおい。

以上その他、直口状の甕の口縁部、体部と思われるもの、小形の甕などの破片が、10数個体出土している。

5. 土錘、棒状陶製品 (図版9)

土錘 (1—11) 大きさから、I～Vに区別できる。IとVは須恵質に焼成されているが、II、III、IVは土師質でしかも生焼成のため、表面が剥落しやすい。

I (1—2) は、最大径3cm、長さ6.3cmの大形の円筒状にちかいもの。孔も径1cm前後と大きい。表面はカキ目風に調整されている。

II (3—4) は、最大径2.5cm～3cm、長さ6cmの中太のもの。

III (5—6) は、最大径1.5cm～1.8cm、長さ5.2cmのわずかに中太り。5はたてにヘラで調整。

IV (7—8) は、径1cm、現長4.5cmの細長いもの。1—2と同様、表面がカキ目風に調整。

V (9—11) は、径9mm～1.1cm、長さ3.6cm～4.4cmの細く小形のもの。9には指紋がのこる。

棒状陶製品 (12—15) 径1cm前後、長さ4cm～6.8cm。中太りの棒状のもので、須恵質に焼成されている。用途は不明。

V 結語

(1)

七和2号窯址は、須恵器と灰釉陶器の両種を生産した古窯である。古窯の規模としては、煙道部が流出しているとはいえ、現存全長6.2mの小形であり、床面の傾斜度は35度～39度とかなりつよい。構造としては、須恵器、灰釉陶器の各操業時に大差がなく、焼成部の床面の傾斜が、多少変化している程度である。須恵器窯から初期の灰釉陶窯におおくみられる燃焼部床面下の「船底形ピット」も、末期の灰釉陶窯から山茶楓窯におおい「分焰柱」もつくられていない。

(2)

焼成されたもののうち須恵器としては、杯2種、蓋2種、盤2種、高盤3種、椀、長頸瓶、短頸壺2種、蒸壺、鉢4種、甕5種等に大別され、器種に富む。このうち甕類以外はロクロ水引き手法によって成形されるが、その切り離しは、ヘラ切りによるもので、椀だけが糸切りされている。色調としては全体に明るい灰色のものがおおい。

灰釉陶器としても器種に富み、椀3種、輪花椀、皿5種、輪花皿、段皿、耳皿2種、長頸瓶、手付瓶、多耳瓶、平瓶、短頸壺、鉢3種、火舍などである。いずれも、ロクロ水引き手法で成形され、その切り離しは、糸切りによる。このうち、椀、皿でも大形のものは、糸切りが、なで、あるいはヘラ削りにより、ていねいに消されている例がおおい。鉢はそのほとんどが、体部の下半をヘラ削りで仕上げられている。施釉方法としては、ハケ塗りのものと、浸ヶ掛けの両種があり、操業の時期的な巾がかんがえられる。

これらは、愛知県・猿投古窯址群の編年によれば、須恵器が折戸10号窯式で9世紀代に、灰釉陶器が黒笹89号窯式で11世紀代にあたる。まさしく同一古窯が、約300年をへだてて再使用されることになる。

(3)

北伊勢の古代窯業生産は、これまでの調査によれば、四日市市・海蔵川流域の平池古窯で開始され、同・岡山古窯址群3号窯、同5号窯でおわっている。この間、この岡山古窯址群では、6世紀代、8世紀代、12世紀代と約300年前後の間隔で断続的に操業されていた。一方、員弁川流域においては、員弁町・暮明古窯が9世紀代に操業はじめ、これも断続的に11世紀代の七和2号窯でおわっている。あたかも、岡山古窯群において、生産がとまっている時期にあたる。それらの操業の契機としては、岡山古窯群の場合、その製品に、瓦、塔、硯等、寺院に深い関係をもつものがあり、古代寺院経営がかんがえられている。

とくに、愛知県・猿投西南麓古窯、同・尾北古窯、岐阜県・美濃須衛古窯など古代窯業主産地

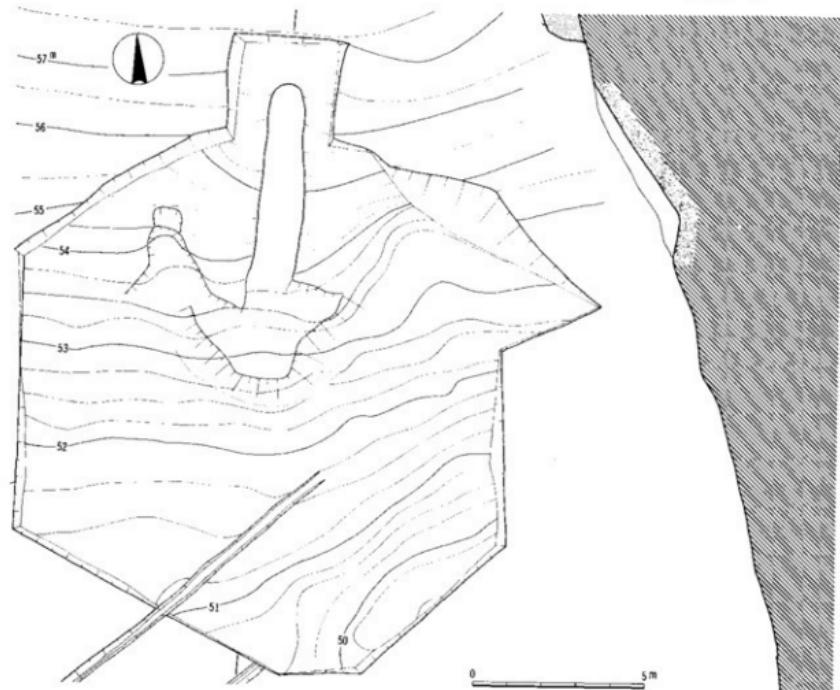
からみれば、この七和2号窯は、周辺古窯の一つといえよう。技術的な系譜は、それらのいずれかに求められるであろうが、この古窯独自の操業の契機は、明らかにしがたい。

(小玉道明)

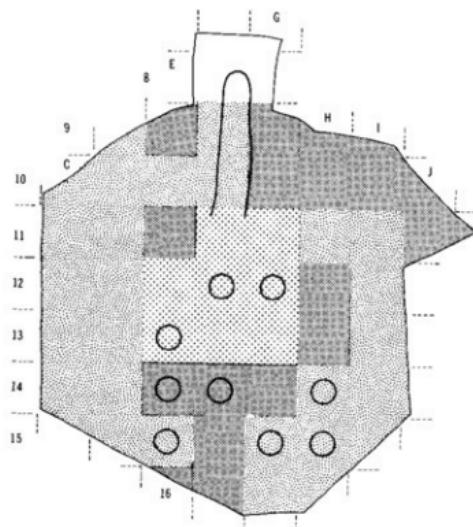
図 版



古窯と周囲の地形（日本住宅公団名古屋支所・桑名大山田地区現況図 1:500 方位は真北）



(1) 古窯地形図 (1 : 150)



(2) 灰原出土土器分布状況

凡例

(漆器器) (灰陶器)



多量 少量



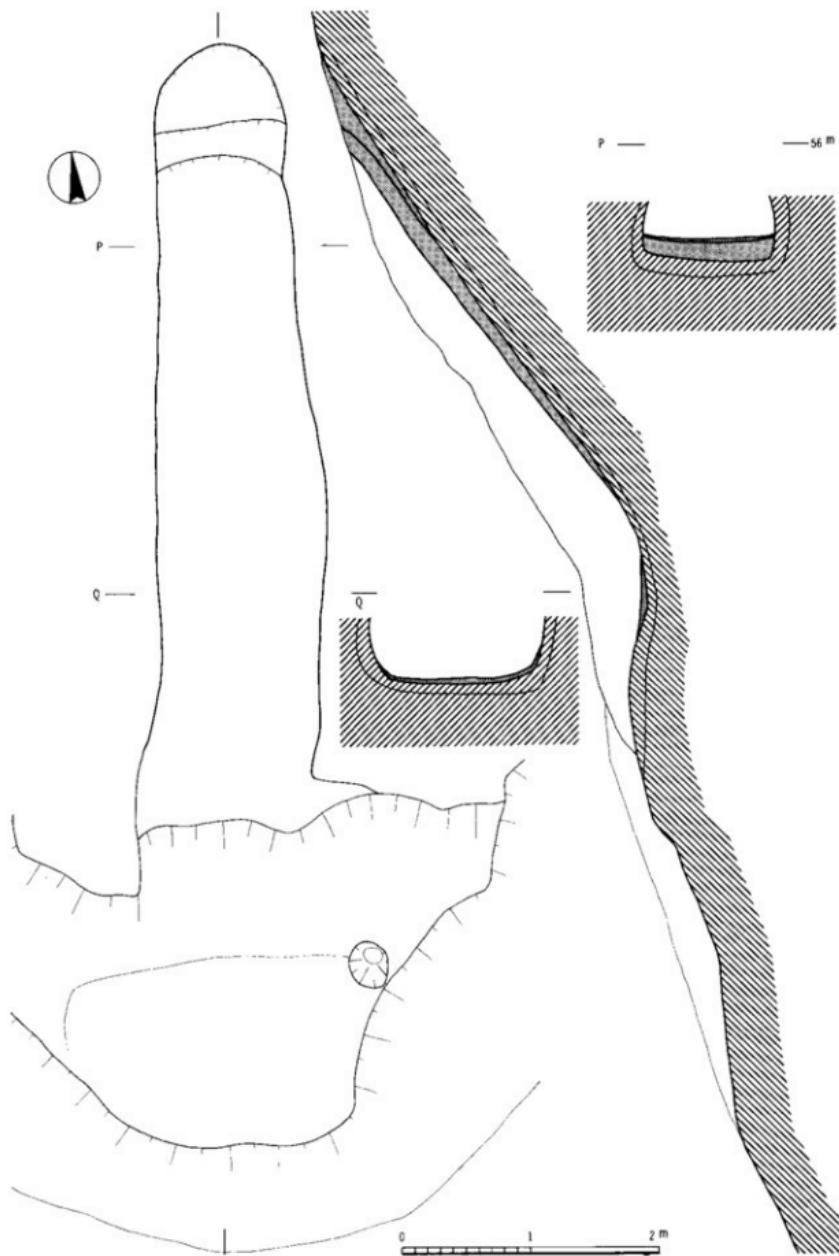
少量 多量



等量

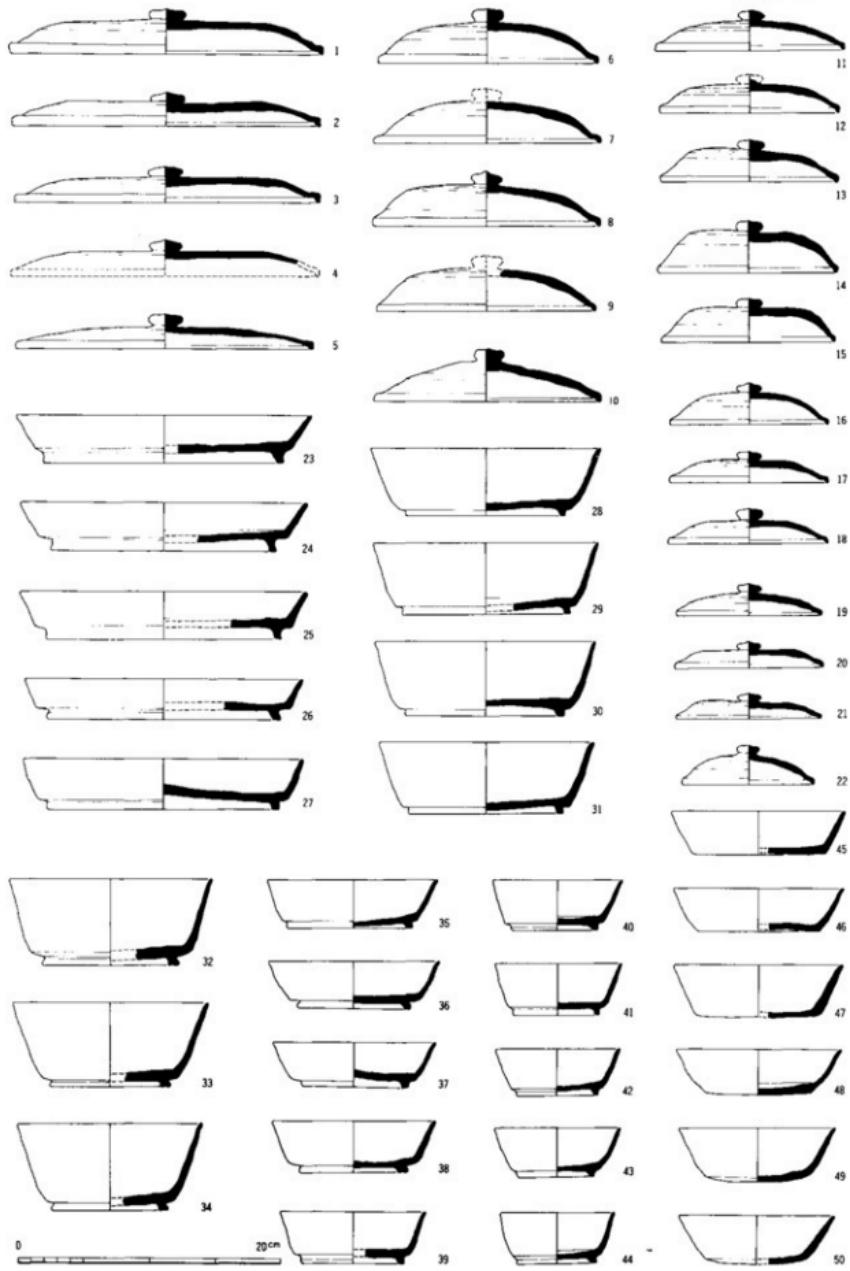


土器器

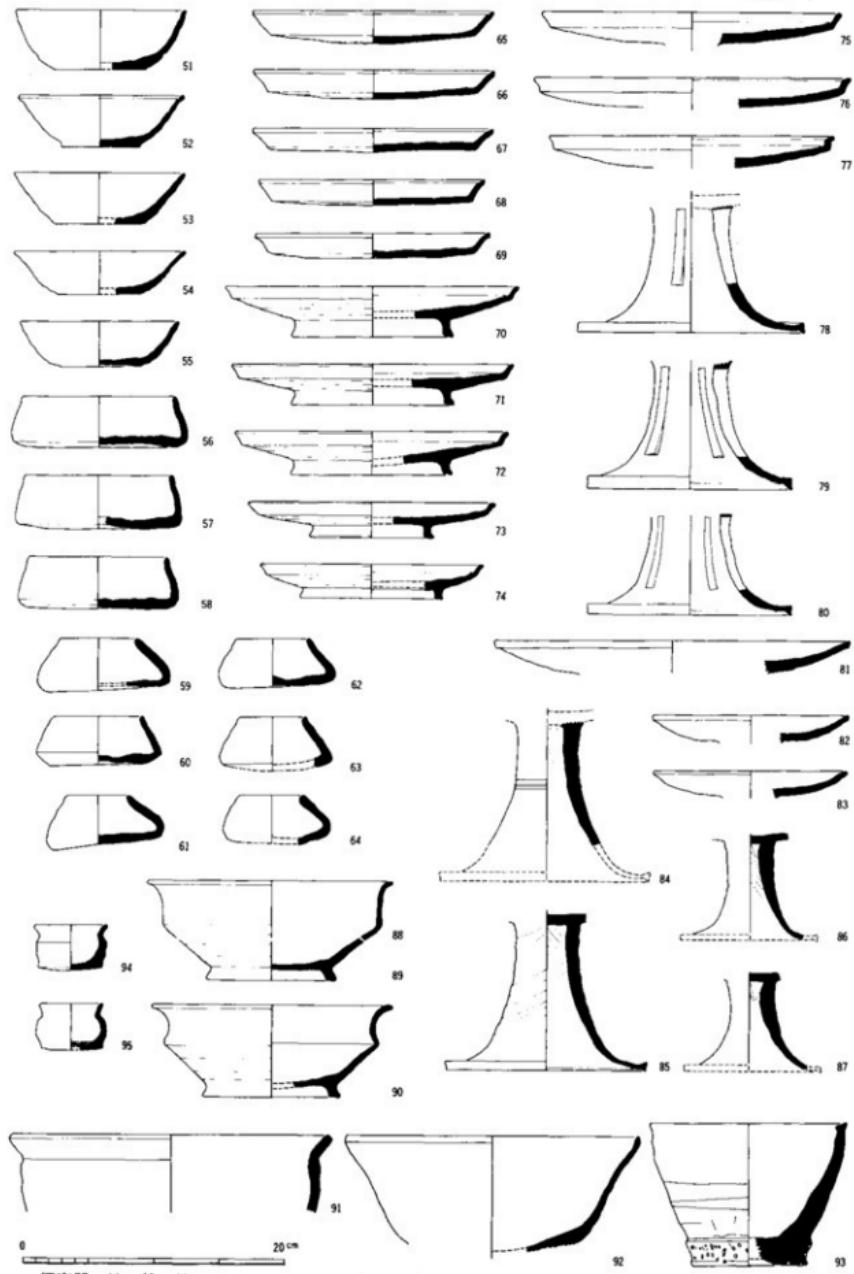


古窯実測図 (1 : 40)

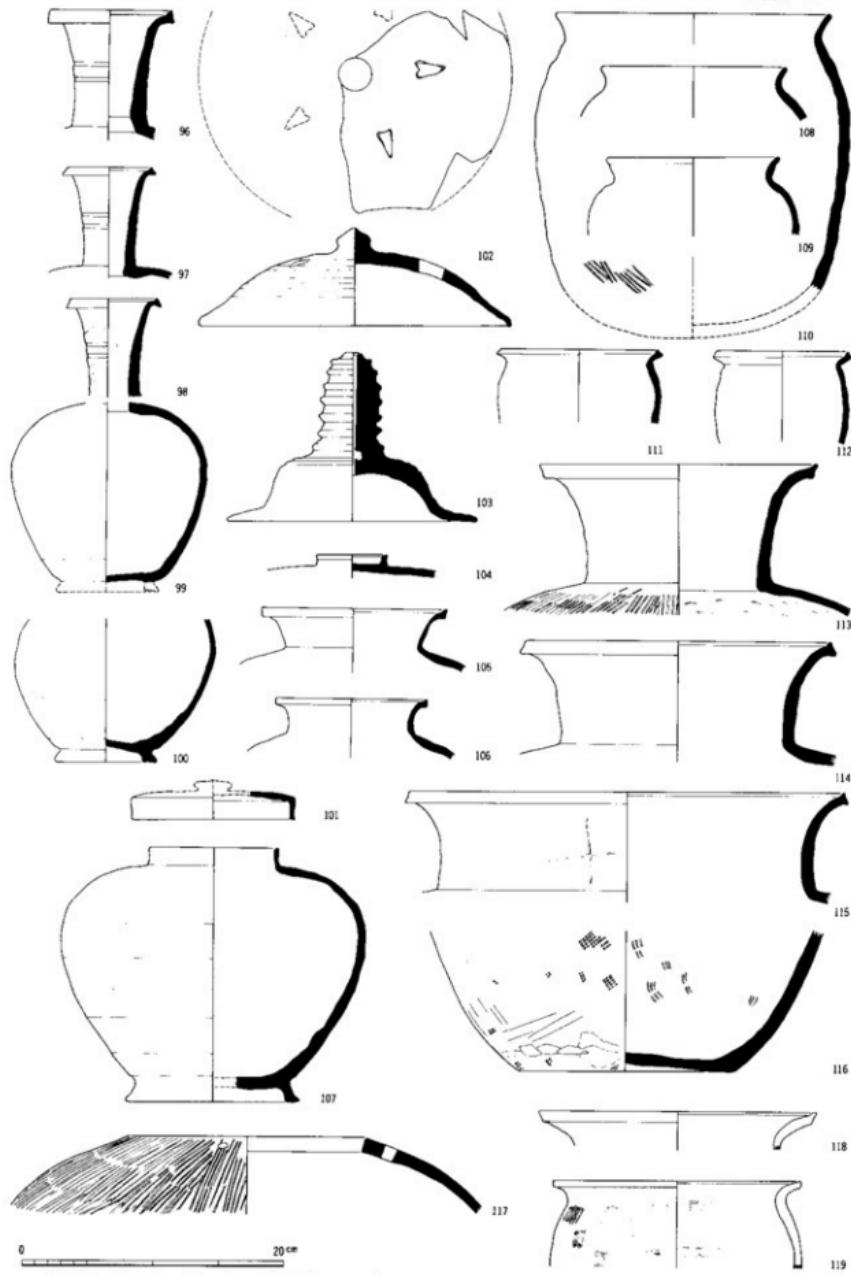
図版 4



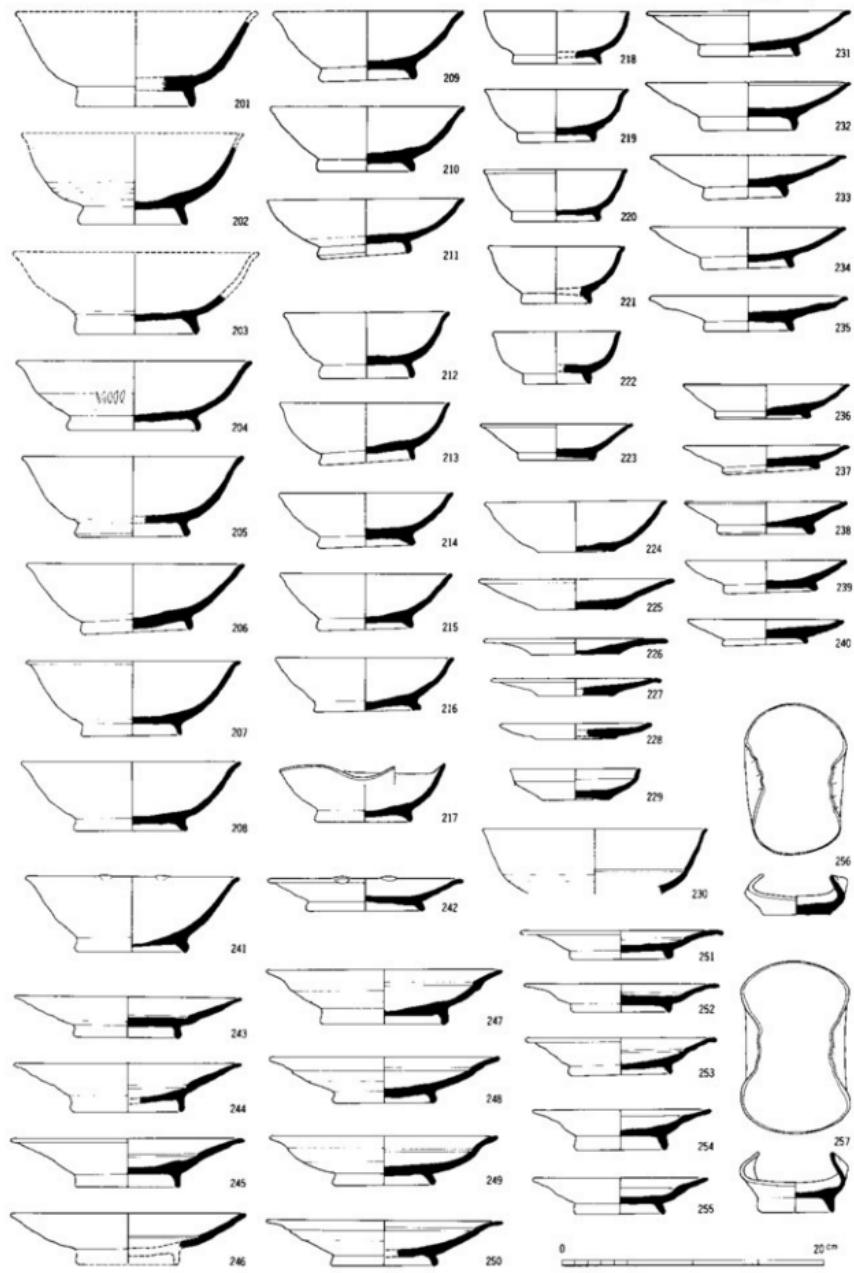
須恵器・杯・蓋 (1 : 4)



須恵器・椀・盤・鉢・灰釉陶器・窯道具 (1:4)



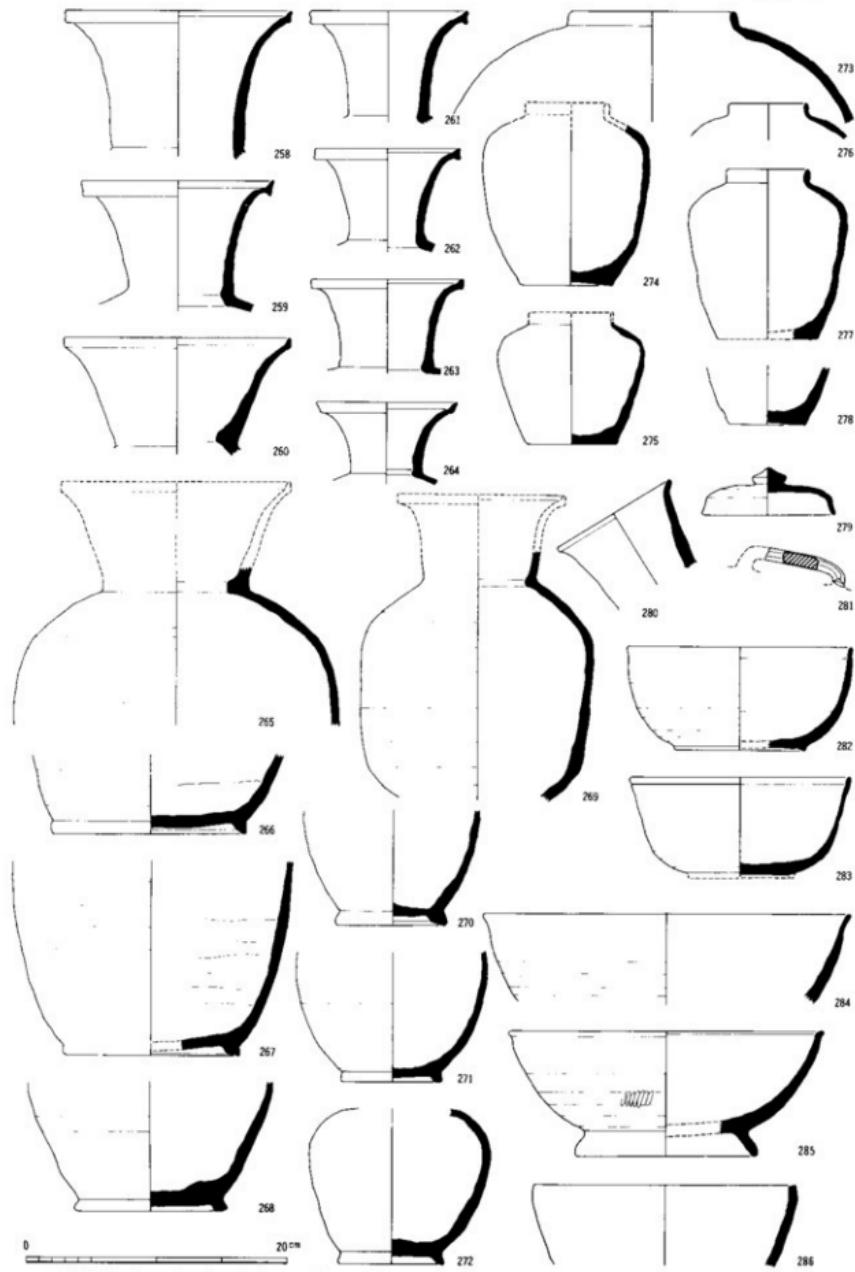
須恵器・瓶・壺・蓋・土師器 (1 : 4)



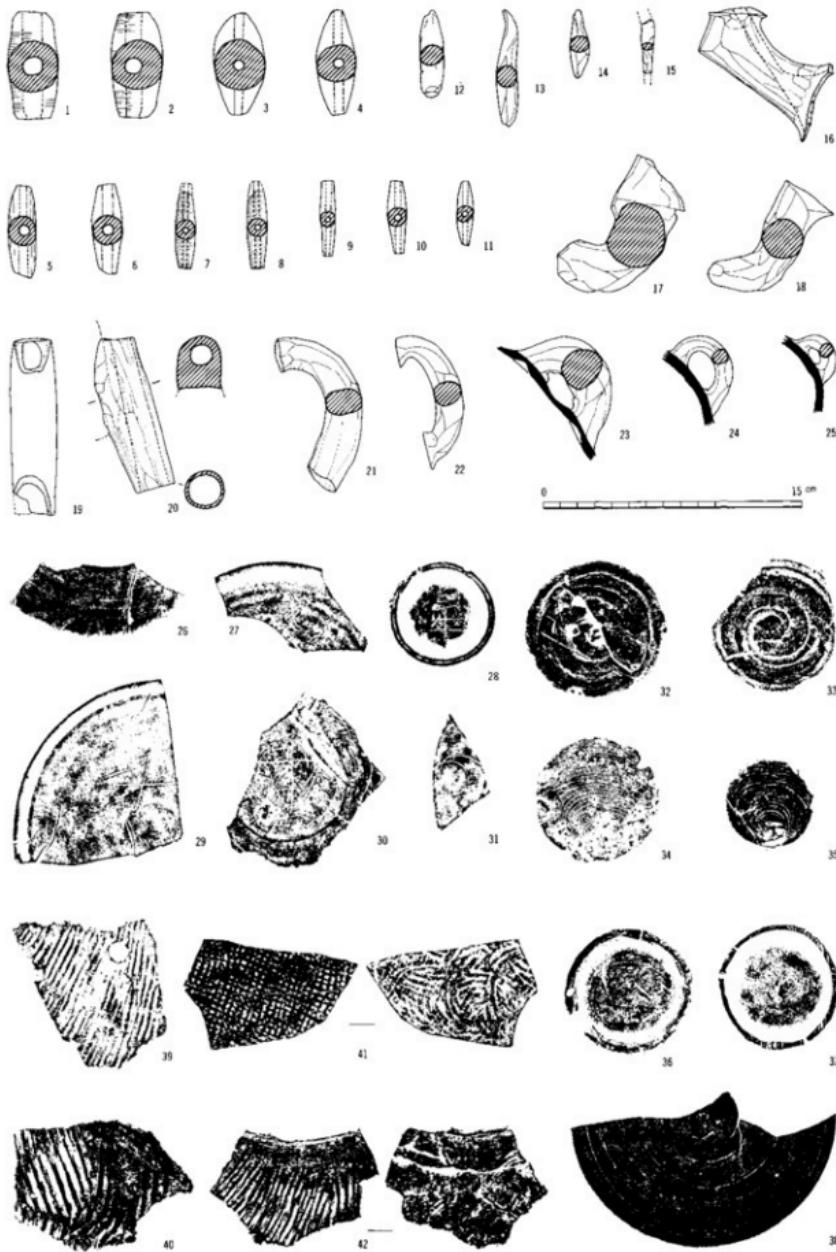
灰釉陶器・碗 盘 (1 : 4)

0 20 cm

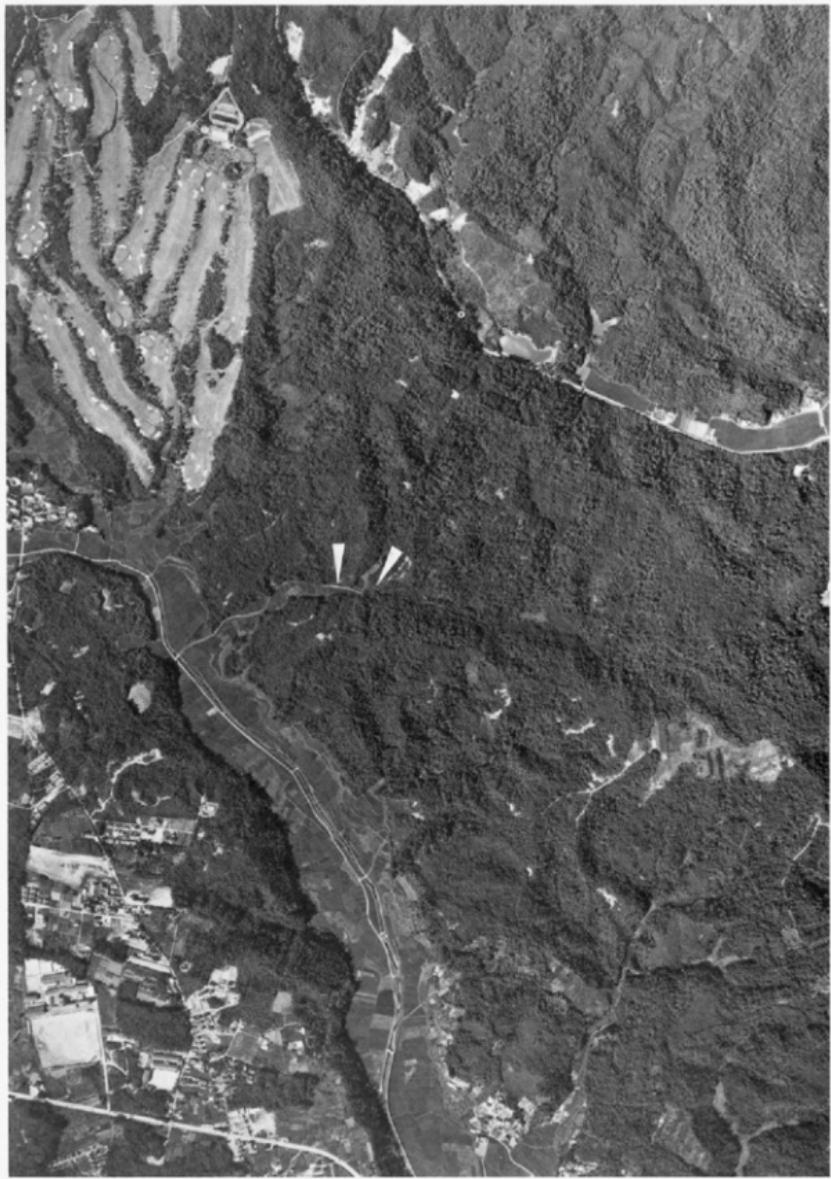
図版 8



灰釉陶器・瓶 盖 鉢 (1:4)



土錘、棒状製品、獸脚、把手、土器拓影 (1 : 3)



七和古墳群（矢印左 1号墳、右 2号墳）



(1) 古窯址全景（南から）



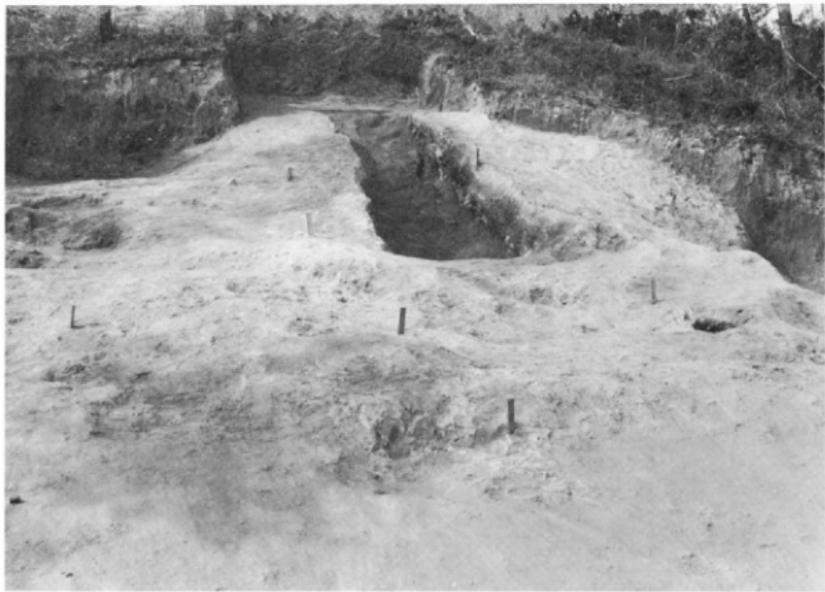
(2) 古窯址全景（南から）



(1) 古窯址全景（南東から）



(2) 古窯址近景（南東から）



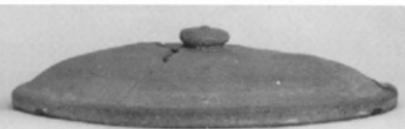
(1) 古窯址近景（南から）



(2) 古窯址近景（南から）



98



11



13



17



107



36



38



2



41



27



66

須恵器（左列、66・1/3 右列1/2）



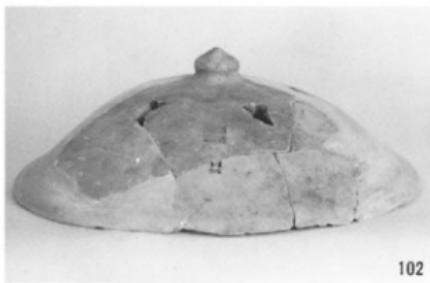
208



259



214



102



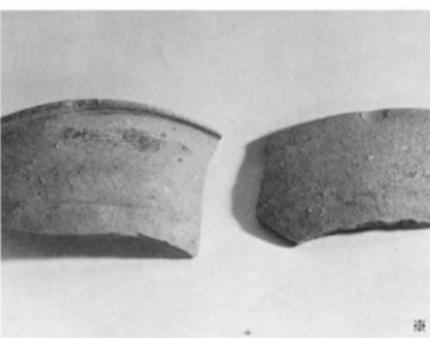
215



103



219



217

258

灰釉陶器（左列1/2 右列1/3）



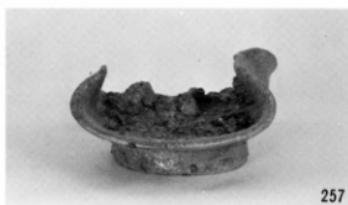
231



256



240



257



248



60



252



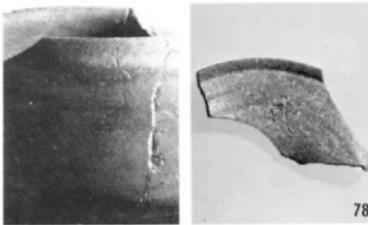
61



94



59



78



重焼き 烧台 土鍤等 (59 78以外 1/3)

三重県埋蔵文化財調査報告 14

七和2号窯址発掘調査報告

1973年3月31日

日本住宅公団名古屋支所

編集

三重県教育委員会

発行

三重県教育委員会

印刷

津市栄町二丁目

東亜印刷有限会社

昭和48(1973)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。